

富山大学人文学部令和7年度卒業論文

女性のライフコースにおける演奏活動の中断と再開
——長期間のブランクを経てピアノの演奏を再開した女性に着目して——

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
氏名 佐藤 智子

目次

第1章 問題関心	1
第2章 先行研究	2
第1節 生涯にわたって継続される演奏活動	2
第2節 女性のライフコースにおける趣味・教養・地域活動	4
第3節 日本社会に根付いたジェンダーに関する文化や価値観	6
第1項 「男は外、女は内」の誕生	6
第2項 多くの女性がたどる「中断・再就職型」のライフコース	6
第3項 男女の賃金格差の拡大	6
第4節 本研究の方向性	7
第3章 調査	8
第1節 調査の目的	8
第2節 調査方法	8
第3節 調査対象者	8
第4節 調査の流れ	8
第4章 調査対象者のエスノグラフィー	10
第1節 Oさん	10
第2節 Nさん	12
第5章 分析	14
第1節 調査対象者二人のライフコース	14
第2節 ピアノを中断したタイミングと動機	15
第3節 ピアノを再開したタイミングと動機	16
第4節 家庭的役割から離れた自分のための学びの時間	19
第5節 ピアノを再開してからの変化	22
第6章 考察	24
第1節 家庭役割によって後回しになる自己	24
第2節 母親役割を遂行する自信を取り戻す手段としてのピアノ	24
第3節 ピアノ再開を起点とした自己探求の連鎖	25
第4節 なぜ「ピアノ」であったのか	26
第5節 子育て期における心理的転換点の再検討：難波（2000）の研究との比較から	27
第6節 ジェンダーの視点から	28
第7節 まとめと課題	28
引用・参考文献・参考資料	29

第1章 問題関心

近年、子供の頃に習っていたピアノを大人になって再開する人は珍しくない。たとえば、筆者が参加したエリーゼ音楽祭（大人のためのピアノコンクール）では、ソロ出演者77名、連弾・アンサンブル5組のうち、プログラムに記載された情報から21名がピアノを再開した人であった。そのうち16名は女性であり、特に女性に多い傾向であるように感じる。ピアノを再開した理由は、子供のころにできなかったことをやり直したいという動機、子供や友人の影響、さらには困難を乗り越えるための力を得たいという願いなど、多岐にわたる。再開した人たちは子供時代以上に熱心に練習し、よりよい演奏を目指していた。そうした姿に心を打たれ、彼女たちにとってのピアノは単なる余暇活動を越えた意味を持つのではないかと感じた。

一度中断した物事を再開するにはまとまった時間や強い意志が必要である。にもかかわらず再開したのは、どのようなきっかけや動機があったからなのか。その再開は人生にどのような意味をもたらすのか。さらに中断、再開という経験がどのように語られ、自己の生き方に位置づけられているのだろうか。趣味や習い事には様々な心理的・社会的意義があるとは言われているものの、途中で中断した活動の再開、特に女性のライフコースとの関連については、今後さらに検討が求められる。

本稿では、子供のころにピアノを習っていた女性が長期間のブランクを経てピアノを再開する過程を詳細に分析することで、趣味再開の意義やライフコースに与える影響について明らかにすることを目的とする。

第2章 先行研究

第1節 生涯にわたって継続される演奏活動

船越（2022）は、生涯にわたって継続される趣味としての演奏活動の実態を明らかにするため、これまでの人生においてトータル5年程度の演奏経験があり、かつ、現在も何かしら演奏を続けている個人を対象に Web でアンケート調査を実施した。アンケート項目は、〈フェースシート〉、〈これまでの音楽活動経験〉、〈現在の音楽活動の状況〉、〈ブランクの状況〉、〈活動の継続動機〉という5つのカテゴリで構成した。最終的な回収回答数は703、有効回答数は602であり、その属性は男性が45.3%、女性が54.4%、非回答が0.3%であった。年代は10代から80代までと幅広いが、特に40代50代の回答が全体の49%を占めていた。主に演奏している楽器は、回答が多かった順に合唱（132人、18.9%）、ホルン（59人、8.4%）、ピアノ（47人、6.7%）であった。現在取り組んでいる演奏活動の活動形態は、回答が多い順に合唱での活動（134人、22.26%）、オーケストラでの活動（132人、21.93%）、音楽教室に通う・レッスンや指導を受けている（66人、14.29%）であった。

調査では、「ブランク」と定義した3年以上の中断の経験をしたことがある割合がおよそ5割であった。また、2～3か月以上3年未満の休止期間を経験した人数を合わせると回答者全体の9割以上が、中断を経ながら演奏を続けてきていることが明らかになった。生涯的な演奏活動は一般的に、必ずしも常に継続状態にあるわけではなく、いったんは活動をやめ、そして再開するといったスタイルで、継続的に行われていく取り組みである。

ブランクに入る理由として最も多いものが「練習時間を捻出できない」であった（ブランク経験1回の回答者の71.0%、ブランク経験2回の回答者のうち1回目のブランクについての割合が43.1%、2回目のブランクにおける割合が54.2%）。そのきっかけには多くの場合、何かしらの生活状況の変化があり、生活状況の変化の具体的な内容の多くは「就職」「卒業」「仕事が忙しくなった」「出産」「子育て」などライフステージの転換に関わる典型的なイベントである。ブランク経験1回の男性の場合は「就職」（27.6%）や「仕事が忙しくなった」（28.9%）という社会的経済的自立に関するライフイベントを、ブランク経験1回の女性の場合は、「子どもが生まれた」（29.7%）「育児」（22.0%）という家族形成に関するライフイベントを、それぞれきっかけとして、ブランクに入る割合が高い結果であった。生涯的な演奏活動におけるブランクの多くは、生活状況の変化をきっかけに練習時間の確保が難しくなり、やめざるを得ない状況となることによって発生する。そして、ブランクに入るきっかけとなるライフイベントには慣習的な性的役割分担が影響していることが明らかになった。

「活動再開の動機」に関する質問の結果は、ブランク経験1回の回答者の回答が多い順に「楽器を弾きたい・歌いたい」(64.5%)、「もっと音楽を楽しみたい」(46.2%)、「趣味をつくりたい」(28.4%)となった。「活動再開のきっかけ」の多くは、ともに演奏する仲間や師事する指導者といった「新たな音楽仲間との出会い」(ブランク経験1回で40.5%)であった。船越は、人生その時々暮らしに広がる人との出会いやつながりの中に、音楽する自分の居場所が見いだされたとき、演奏活動は再開されると主張する。

また、生涯的な演奏活動の活動動機にはその時々不安や悩みが反映される。音楽を愛好する気持ちそれ自体にまつわる動機の割合が高い一方で、「仕事以外の時間を持ちたい」「人とのつながりがほしい」「ストレスを発散したい」といった、音楽活動それ自体からは距離をおいた動機を回答する割合も一定数あった。多様な動機をもって継続される取り組みが生涯的な演奏活動であると言える。

第2節 女性のライフコースにおける趣味・教養・地域活動

難波（2000）は、戦後の日本社会を生きてきた中年期の日本女性は、時代の変化を受けてどのようなプロセスを経て、どのように内的に発達変化してきたのか、どのようにこれから先を生きようとしているのかについての理解を深めることを目的に、1995年から1996年にかけて、45歳から55歳の日本人女性7名を対象としたライフヒストリー分析を行い、子育て終了後における女性の心理的变化と自己発達のプロセスを明らかにした。

彼女らの少女時代の日本は貧しく、家庭では怖くて気難しい、あるいは威厳のある父親と、その父親や舅姑に耐え従う母親を見て育った。そして彼女らの多くが当時としては少数派の大学教育を受けながら、「仕事は結婚までの一時的なもの、女は家庭」、という考えを当然のものとして受け入れ、結婚退職を前提として就職した。7人の平均結婚年齢は23.7歳であり、「女性はクリスマスケーキと一緒に、24日（歳）を過ぎると値打ちが下がる」といわれた当時の規範を反映している。

結婚後の彼女らの生活は、子育てがまずその中心となった。子どもとの関わりの中で様々な体験をし、彼女らに自信をもたらした。子育てはそれまで培ってきた価値、信念を実現する場でもあり、子育てに自分なりの価値を見出し、意味づけを行い、肯定的に捉えていた。

子育ての次に彼女らが優先したのは趣味・教養・地域活動であった。彼女らが結婚した1970年代半ば頃からカルチャーセンターがブームになり、詩作、語学、書道、笛、木彫り、俳画、川柳、読書、料理、スポーツ、地域活動などに、子どもが幼いころから意欲的に関わってきた。これらの活動は、彼女らが自分自身の興味、価値に従って主体的に選択し、自己を発揮・表現する重要な場であり、そこで得られる充実感が彼女らの精神的支えになっていた。

第三に彼女らが求めたのが仕事であった。仕事を始めたのは、趣味・教養・地域活動より少し遅れて子どもが小学校に入学した後からである。嘱託職員としてフルタイムで再就職した一人以外はそれぞれ内職的、不定期的、アルバイトの仕事に就いた。どの女性も、家庭と両立できる自分にとって意味のある仕事を求め、仕事を通して自分自身の成長を自覚していた。このように、女性たちは、家事・育児、仕事、趣味・教養・地域活動の場での様々な体験を通して発達・変化してきた。

やがて、彼女らの生活の中で最も大きな責任と義務、時間とエネルギーを要した子育てが一段落した頃に、それまでの人生、生き方を振り返り、それまで脇にやられていた自分自身の欲求や抑えられていた不満が浮上し、新たな人生の方向を目指す転換点となった。一つの大きな仕事をひとまず果たしたという解放感の結果、それまでの様々な肯定的・否定的体験を通して成長・変化してきた自分に気付き、そのような自分を肯定していた。そして、「これからは私の人生を生きる」と自己宣言し、人生後半

の目標を定め、新たな行動を起こしていた。その目標は、これまで磨いてきた趣味・教養・地域活動を深めることであった。これらの活動は、真に彼女らの内的欲求を充足し、苦しいときの精神的支えになり、生涯の目標となり得ていた。

このように、母親役割の終了後に「自分のために生きる」段階へ移行し、自己実現や自己表現を目指すプロセスは、女性のライフコースにおける重要なテーマといる。

第3節 日本社会に根付いたジェンダーに関する文化や価値観

第1項 「男は外、女は内」の誕生

第二次世界大戦前において日本の人口の過半数を占めていた農家では、妻も子どもも含めた一家全員で農業に邁進することが当然だった（加藤 2005）。

19世紀末から、従来の家族とは異なる新しい家族という意味を込めて「家庭」という言葉が普及してきた。家庭の新しさとして、「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業が想定され、家庭は女性が責任を持つべき領域であると考えられた。

20世紀に入り、新中間層（官公吏や会社員、教員などの職業に従事し、月給によって生計を立てていく人々）が都市部を中心に登場してきた。新中間層の家庭では、夫が市場労働に従事してお金を稼ぎ、妻が家庭の中で家事や育児に専念することになった（木村 2013）。

第2項 多くの女性がたどる「中断・再就職型」のライフコース

この「男は外、女は内」という価値観により、多くの女性達は、結婚・育児期に就労を一時中断し、子育てが一段落した年代になって再就労する。そのため、日本における女性の年齢別労働力率をグラフに描くと、20代後半から30代前半の部分が大きくへこみ、アルファベットのMの文字に似た形になる。このような女性に特有の「中断・再就労型」のライフコースをM字型ライフコースまたはM字型就労パターンという。また、M字型就労パターンの労働率が再び上昇する部分はパートや派遣労働の増加に負う面も大きく、M字型のくぼみの左側では正社員、右側ではパートという勤務が多い現状にある（加藤 2005）。

第3項 男女の賃金格差の拡大

女性のM字型就労は、男女の賃金格差につながる複数の要因となる。女性は退職・再就職が多いため、男性に比べて勤続年数が短い。この事実に基づき、企業は女性の雇用を控えたり、それほど教育訓練のいらぬ一般職に回したりする。また、従来の日本的な年功序列型の昇進システムにおいては勤続年数が昇進に直結したため、勤続年数の短い女性たちは結果として昇進しにくく、相対的に低賃金になる。出産や育児を経て再就労する際、多くの女性はパート勤務や周辺労働をするため、日本は諸外国と比べて男女の賃金格差が大きい。

頑張っても仕事を続けても昇進や昇給が見込めないのならば、結婚して子どもを持った女性は家事・育児に専念して夫を支えた方が家計的に有利になると考えられる。性別役割分業は家計に関する合理的な計算によってもたらされている面もあり、現在も分業のあり方として強い影響力を持ち続けている。このような男女の賃金格差が性別役割分業を強化し、構造を再生産している（加藤 2017）。

第4節 本研究の方向性

これらの先行研究から、生涯的な演奏活動は多くの人にとって中断と再開を繰り返しながら、多様な動機をもって継続されていく営みであり、その背景にはライフイベントや生活状況の変化が影響することが示されている（船越 2022）。また、難波（2000）は中年期以降の日本人女性にとって、趣味・教養・地域活動が自己実現の場として重要な位置を占め、母親役割の終了を契機とした心理的転換点の後に人生後半の目標として位置づけられていくプロセスを明らかにした。

しかし、まず船越（2022）においては、演奏活動の中断や再開にジェンダーや時代背景がどのように影響しているかについて十分に分析がなされているとは言い難い。また、難波（2000）の研究では、趣味は主として母親役割終了後の人生後半における自己実現の場として描かれているが、趣味の再開をそのように画一的なライフコースでとらえられるものだろうか。

このようにしてみると、ある程度長期にわたる中断を経てピアノを再開するという経験が、どのような語りによって自身の生き方に位置づけられ、ライフコースにどのような影響を及ぼすのかについて、演奏を再開した個人の語りを分析する意義はあると考えられる。そこで本研究では、ピアノを再開した女性へのライフヒストリーインタビューを通じて、中断と再開がどのように意味づけられ、人生のどの段階でどのような変化をもたらすのかを明らかにすることを目的とする。

第3章 調査概要

第1節 調査の目的

本調査では、長期間のブランクを経てピアノを再開した女性のライフコースにおいて、ピアノの再開がどのように意味づけられるのかを明らかにすることを目的として、ライフヒストリーインタビューを実施した。

第2節 調査方法

インタビューでは、子供期のピアノ経験、中断した理由、再開のきっかけ、現在のピアノとの関わりなどピアノに関する項目の他、仕事や子育てなどの項目に関して、インタビューに自由に話してもらった半構造化インタビューの方法をとった。調査では対象者に許可を取って録音し、後にトランスクリプトを作成し、分析を行った。

第3節 調査対象者

対象者は、子供期にピアノを習い、長期間のブランクを空けてピアノを再開した経験を持つ女性二名である。両者ともピアノのコンクールや弾き合い会の場で筆者が直接出会った。

・Oさん：50代後半女性。東京都在住。子どもに関わるNPO団体で勤務。三人の娘がいる。

・Nさん：60代前半女性。富山県在住。学童保育で勤務。三人の娘がいる。

第4節 調査の流れ

第1回

日時：2024年11月27日14:20から約90分

対象者：Oさん

方法：zoomでのオンラインインタビュー

第2回

日時：2025年1月28日20:07から37分

対象者：Oさん

方法：zoomでのオンラインインタビュー

第3回

日時：2025年9月7日20:30から26分

対象者：Oさん

方法：zoomでのオンラインインタビュー

第4回

日時：2025年11月4日15：50から約1時間

対象者：Nさん

方法：カフェでの対面インタビュー

第5回

日時：2025年12月23日15：50から約10分

対象者：Nさん

方法：カフェでの対面インタビュー

第4章 調査対象者のエスノグラフィー

第1節 Oさん

1967年2月17日アメリカシカゴで出生。4歳からピアノを触るようになり、稽古で初歩的なことを習った。父の転勤で4、5歳のときにアメリカから日本に移り、以降は自然が豊かな広島県府中市で過ごした。稽古事が少ない中で、稽古事としては定番のピアノを習い始めた。幼少期は気管支が弱く、2歳と5歳のときには肺炎で入院することもあった。

小学校に入学してからも体が弱く、熱が出て学校を休むことが多く、体育も見学せざるを得ず、運動ができないという自己認識が形成され、全てにおいて自信を持てなくなった。体力向上のために父に言われてランニングや縄跳びを毎朝続けた。次第に体が強くなっていくことを実感し、小学校6年生のときにはそれまで医師に禁止されていた水泳の授業に参加できるようになった。しかし、思うように泳げず、悔しいという感情だけが残った。

中学校の体育の授業でバスケットボールに出会い、楽しさを知りバスケットボール部に入った。また、小学校時代に制限されていて悔しさが残っていた水泳へのリベンジとして水泳部にも入部。二つの運動部で活動することでさらに体が丈夫になるのを実感し、マラソン大会では上位に入るなど運動能力への自信がついてきた。さらに駅伝も経験し1区を1位で走り切ったことでチームを優勝に導いた。

マラソンや駅伝の成功体験から高校では陸上部に入部。習い始めてからずっとピアノは学校と並行した義務教育的なものと思え、決してワクワクするほど楽しいわけではなかったが、高校を卒業するまで続けた。

大学は関西の女子大の児童学科に進学し、寮生活を送った。必須科目に音楽実技があり授業でピアノを弾いていた。また寮の隣には同窓生による音楽教室があり、チェンバロを習った。

大学卒業後は幼稚園教諭として働き始めた。大学生活中に実家が千葉に移り、就職後は実家の近くのピアノ教室に通い始めた。3年目で結婚を機に退職。1993年に長女が生まれピアノを中断し、育児に専念する生活を送った。1995年に次女、1999年に三女を出産した。

長女が小学校1年生になったとき、長女の同級生の母親で北海道出身の女性と出会い、「東京にいても自然の中でいっぱい遊ばせたい」という思いに共感し、月に1回子どもたちの遊びを見守るボランティア活動「プレイパーク」を発足。口コミや手書きのチラシを印刷して活動を広め、最初は月に1回だった活動が週5日にまで増えた。自分の中で学びがあるようなことをやろうと思い、小1、年中、0歳の3人の娘を連れて絵本の翻訳講座に参加した。日本語の表現の美しさを知り、絵本の翻訳のコンクールで優秀賞を受賞した。三女が2歳半くらいのとき、保育園に預けるために仕事を探

し、保育園で調理の仕事を始めた。園の方針と合わなかったため1年ほどで辞め、新しく開設した保育施設で再び給食に関わる仕事に就いた。週3日ほどの頻度で10年以上続けた。

三女が中学一年生のとき学校に通えなくなり、三女を元気づけるために合唱曲の伴奏をするという形でピアノを再開。その際、単発のレッスンでお世話になった教室で発表会にも出演した。三女が高校生になり、大学進学を決意するも勉強に身が入らない姿に思い悩む。自分も気が進まないものに目標をもって取り組む姿を見せようと本格的にピアノを再開。三女が中三のときプレイパークの代表者がNPO法人を立ち上げ、乳幼児のための室内の活動の幅を広げ、現在はその運営に携わっている。乳児を持つ親子の居場所づくりや一時的預かり、育児相談などの子育て支援を主に行っており、場合によっては区役所の専門機関と連携し必要な支援へと繋いだり、地域の公園や児童館などを訪問し、困りごとを持つ親子の相談に対応したりしている。また、親のうつ病や子どもの人間関係の悩みなど家族の健康問題が契機となり、「体に優しいごはんを作りたい」という食と健康への関心から腸栄養学を学ぶ。腸栄養学の講師資格を取得し、少人数向けに講座や調理実習を実施している。

第2節 Nさん

1965年2月26日、富山県氷見市に生まれる。姉が先にピアノを習っており、幼いころからピアノを触って遊んでいた。親には当時、2人の子どもにピアノを習わせるという選択肢がなく、Nさんは姉が習ってきて弾いているのを見様見真似で弾いていた。小2のときに姉がピアノをやめたため、今度はNさんがピアノ教室に通えることになった。その教室では稽古の順番が決まっており、その通りに弾いていくことがNさんにとっては面白くなかった。それよりも好きな曲を好きなように弾く「ピアノ遊び」のほうが楽しかった。先生との相性が合わない上に、発表会の方針の変更でモチベーションが上がらなくなったという理由で、中学生のときにその教室をやめた。

高校生のとき、新しい先生との出会いがあり、再びピアノ教室に通い始めた。そこでも同様に稽古の順番があったが、その先生は「ちゃんとピアノを弾かせてくださった」。音楽の進路を視野に入れたこともあり、楽典、コンコーネ、コールユーブンゲン、伴奏などの音楽の基礎にも取り組み、一番夢中になった時期だった。発表会では、難しくても自分が弾きたい曲を弾けるのが楽しかった。小、中、高の学校生活を通して、怒りやすいという特性があり、友達を作りづらく、それなりになじみはしても距離を置いていたという。

高校卒業後は、製造業で事務の仕事に就いた。このときも週に1回のレッスンには通い続けた。1986年、21歳のときに結婚。当時は結婚後もピアノを続けるという選択肢がなかったため、高校生のときから通ったピアノ教室をやめた。

その後、1988年に退職し1989年に長女を出産、1991年に次女を出産。長女はとも頭がよく、周りから見るとどっちが大人かわからない、子どもが大人を育てているというような状態だった。そんな長女の個性を抑えつけて育てようとしていた。

1994年に三女を出産した三女が生まれる。しかし、生後わずか57日で手術をすることになった。生まれたばかりの我が子が死んでしまうかもしれないという筆舌に尽くしがたいショックやつらさを経験した。それまでは私が子どもを育てていると思っていたが、子どもが私を育てているということに気づき、人生観が変わったのを感じた。そして長女の個性を受け入れ、育ちたいように育つといい、と思えるようになった。このときの経験が今の自分の考え方の土台になった。子どもたちが成長するにつれてこれ以上子どもに関わっても子どものためにならない、と思うタイミングが増えた。子離れをしないといけない、子どもに関わりすぎない自分でいたいという思いから、他に時間を使ってやりたいことを考えたときにピアノが浮かんだ。自分のためにピアノを弾きたい、ピアノのために自分の時間を割きたい、という思いから長女が小6、中1くらいのときに再びピアノを始めた。

自分が子どもたちを育てる中で、自分が「普通じゃない育ち方をした」ということに気付いた。まずは子どもたちを育てることを優先し、長女が高校に入ったことをき

っかけに、次は自分で自分を教育する番だという気持ちになった。幼少期の大変な経験から「一番わかりにくい自分」を理解するために、通信制大学に入学し、心理学を学んだ。自閉症スペクトラムの概念を学び、幼少期を振り返ることで自分自身の理解を深めた。大学では芸術に関する教科も学んだ。ピアノをやっていることで理解が深まったこともあれば、作曲家の違いや哲学者デカルトが音楽に与えた影響などを知って衝撃を受けたこともあり、ピアノを弾くことの楽しさが一層増した。

義父母の介護のため、レッスンに通えない時期もあったが、それでも家でピアノを弾く時間は大切にしていた。3年前くらいから学童保育の仕事をしている。大学で心理学の知識を身につけたことで、自分を理解できるようになっただけでなく、学童の子どもたちの状態を俯瞰して見られるようになり、「消化酵素ができた」ように感じている。

第5章 分析

第1節 調査対象者二人のライフコース

本研究の対象者であるNさん(1965年生)とOさん(1967年生)は、ともに高度経済成長期に幼少期を過ごした世代である。両者とも、小中学生のピアノ学習率が急激に伸びた1970年前半からピアノを習った(唐津2022)。

Nさんは高校卒業後、1983年に就職し、1986年に結婚、1988年に退職した。Oさんは大学卒業後、1989年に就職し、1992年に結婚、同年に退職している。結婚した年齢に関してはNさんが21歳、Oさんが25歳であり、当時の女性の平均初婚年齢(1986年:26.5歳、1992年:27歳)と比較すると、いずれもやや早い時期の結婚である(国立社会保障・人口問題研究所2025a)。二人とも結婚・出産期に退職しており、日本女性のM字型就労パターンと整合している。

出産については、Nさんが1989年に長女を、Oさんが1993年に長女を出産しており、その後ともに三人の娘を育ててきた。結婚持続期間15~19年の夫婦の平均出生子ども数である完結出生児数が当時2.2人前後で推移していたことを踏まえると、両者はいずれも比較的多子の家庭を形成していたといえる(国立社会保障・人口問題研究所2025b)。

その後、Nさんは長女が小学校に入った頃に工業系の会社の事務職で再就労した。パートとして週5日、1日7時間ほど勤務した。退職後は2、3年のパート勤務を繰り返した。退職は、勤務先の間人関係が悪くなったことが理由のときもあれば、義母の体調の変化や子どもの受験といった家族の状況に合わせるためだったときもあった。現在は学童保育の仕事をメインに週3回、4時間程度パートタイムで働いている。

Oさんは長女が小学校1年生、三女が0歳のときに、こどもたちの外遊びの環境をつくるプレイパークという任意団体を発足し、多いときは週に5日、当初は無償ボランティアとして活動をした。三女が2歳半くらいのときに保育園での調理の仕事をパートタイムで始めた。1年で退職した後、新たに開設された保育施設でやはり調理のパートタイムの仕事を始め、週3日ほどの頻度で、三女が中学校3年生のころまで約10年続けた。その後、プレイパークをNPO法人化して、活動内容も、外遊びだけでなく、室内で乳幼児やその親を対象とした活動やサポートまで広げた。現在は、そこで有償スタッフとして働いている。

このようにしてみると、NさんOさんのいずれも、再就労(ボランティアとしての活動を含む)のタイミングは、長女が小学校に入った時期であり、その働き方は、パートタイム勤務を基本としている点でも日本女性のM字型就労パターンと整合していることがわかる。

第2節 ピアノを中断したタイミングと動機

Nさんは結婚するタイミングで、Oさんは長女を出産するタイミングで、それぞれ幼少期から続けてきたピアノから離れている。船越（2022）の研究でも出産や育児といったライフイベントをきっかけにブランクに入る人が多いという結果になっており、この点では両者ともに典型的なパターンであると言える。しかし、ブランクに入る理由としてはそれらの出来事によって練習時間を捻出できなくなったから、というよりも「結婚したら女性は家事や育児などの家庭役割を引き受けるもの」という当時の常識や社会全体の価値観が強く影響している。2人へのインタビューにおいて、ピアノをやめた理由についての回答では、子育てに大きな責任を感じ、優先していた語りが見られた。

「当時は結婚後も続けるっていう選択肢がなかったので。」(Nさん)

「とりあえずあの人たち(娘3人)をまともに育てるために、とりあえず自分のことは後回しにしようと思って。」(Nさん)

「結婚して子どもができたから、それでもうなんとなく、育児に専念するなら、自分の時間はとれないかなって思い込みみたいなのがあって。本当に急に弾かない時期が来てしまって。」(Oさん)

両者は結婚、出産、育児をきっかけに、練習時間を捻出できなくなったからピアノを中断したというよりも、「育児に専念するなら自分の時間は取れない」という思い込みや「一般的に趣味は結婚後も続けるものではない」といった価値観が強く影響していたように見受けられる。このように二人は、女性の家庭的な役割を当たり前のものとして引き受け、その義務や責任を果たすためにピアノを中断したと考えられる。

第3節 ピアノを再開したタイミングと動機

Oさん、Nさんは結婚後、3人の娘たちの子育てが最優先となった。そして、子どもたちと向き合い、成長を実感する日々の中にピアノを再開するきっかけがあった。

Nさんの長女は非常に賢い子どもで、Nさんが長女を育てる様子は周りからは「子どもが大人を育てている」ように見えたと言う。そんな長女が小学校6年生から中学校1年生くらいの思春期に入る時期に、これ以上子どもに関わっても子どものためにならない、と思うことが増えたそうだ。そのような場面の一つを切り取って次のように語った。

ちょうど小学校6年から中学って思春期の入り口なんですよ。今までうんしか言わなかったのに、ちゃんと自分の意見を言うてる。たとえば、話の中で何かのお願いされたときに、それはパパが怒るからだめだよって言ったのを、ある日、上の子から「お母さん、パパのことしか言わないけどお母さんの気持ちはどうなの？」って言われて、それにショックで(笑)。で、そういうことがいっぱいあって、これはちょっと子どもに関わってもだめだなって思って。よく鳶が鷹を生むって言いますが、鳶が鷹を育てるのは大変なんですよ(笑)(Nさん)

「結婚後もピアノを続ける」という選択肢がなかったためにピアノを中断したと語っているように、自分の意志よりも当時の社会で優勢な価値観を優先したNさんは、自分の意志をしっかりと持つ、成長した長女の姿に圧倒されたのではないか。また、Nさんは長女の思春期について「強烈だった」と語っている。母親としての自分に自信を失いかけ、子どもに関わりすぎない自分でいたい、子離れをしないといけないと思うようになったのではないか。子どもと程よい距離を調整するためにピアノの再開にたどり着いた。

子離れしなきゃって思って。子どもに関わりすぎない自分でいたかったので、やりたいうことを考えた時にピアノかな、というのがありました。それこそピアノを自分のために、ピアノのために自分の時間を割きたい、子どものためじゃなく。そういう気持ちに近かったかな。(Nさん)

Oさんも子育てに関する悩みと向き合う中で、複数の段階を経てピアノを再開するに至った。

中高一貫校に通っていた三女が中学1年生の秋頃から学校に通えなくなり、Oさんは親として深く思い悩んでいた。ちょうどそのころ、Oさんが所属していたPTAのコーラスはで伴奏者を募っていた。その曲は三女が小学生のときに所属していた合唱サ

ークルで歌っていた「COSMOS」という合唱曲であった。Oさんはそれまで伴奏に立候補した経験はなかったが、三女にとって思入れのある曲を家で弾けば、三女の心を動かせるのではないかと思い、勇気を出して立候補した。このことがピアノを再開する最初の一步となった。

小学校のときに、合唱クラブっていうのに娘が参加してて、すごくこう生き生き歌ってたのが印象に残ってて、そのとき私は伴奏はしてなかったんだけど。小学校卒業してからもう4年くらい経っていた時期ではあったけど、ああこの伴奏曲を家で弾いたら娘が聞いてくれる！と思って。(中略)娘は自分の生き生きしてた小学校6年生のときを思い出して、なんか変わるかなあ、良かったときの自分を思い出してくれたらいいなと思って、もう勇気を出して「私『COSMOS』の伴奏やらせてください！」って言って。(Oさん)

家で伴奏曲を練習すればそれが娘の耳にも入り、三女の煮詰まった心を解せるかもしれない、小学生のときに自分自身の力を精一杯発揮していたときのことを思い出すかもしれないと思い、伴奏者に立候補し練習を始めた。

音楽記号やテンポを一定に保つことなどに気を配り、歌う人が困らないように精一杯の練習をしたが、コーラスの練習では指揮者から歌いにくいと指摘される。上達の限界を感じ、改善のヒントをもらうためにピアノ教室の単発のレッスンを申し込んだ。レッスンで動画を撮ってもらったことではじめて、演奏時に体に力が入りすぎていることに気付いた。その癖を改善してコーラスで伴奏をすると、歌いやすくなったと言われた。先生に感謝の気持ちを伝えるために再び教室に足を運ぶと、2か月後の発表会への参加を勧められた。迷った末に出演を決め、自分の好きな曲を選び、発表会に向けての練習を始めた。練習を始めるとピアノに熱中するようになった。

楽譜を買ってきて練習し始めたらもう止まらなくなって、6時間とか7時間とかもうずっと弾いている自分がいて、もうそこからピアノにスイッチが入っちゃったっていう感じでしたね。(Oさん)

三女の不登校という子育てに関する悩みを抱えていたタイミングで、音楽で三女の心を動かそうとピアノにたどり着いた。合唱の伴奏の指導を受けるにあたって新しい指導者と出会い、その後は発表会にも出演し、自分が弾きたい曲を自分のために演奏することになった。当初は三女のために再開したピアノだが、無意識のうちに自己と向き合う活動へつながる起点となった。

その後、Oさんの三女が高校生になり、卒業後の進路を考えるとOさんは再び頭を悩ませることになる。大学進学をしたいという意志があるものの、なかなか勉強に身が入らない三女に対して、Oさんは仁王立ちになって勉強するように言うが、三女の行動は変わらない。言葉で伝えることの限界を感じ、母親として他に自分にできることは何かを考え、自分が高校生のころに弾いていたが、十分な達成感を得られないまま中断していた曲を思い出した。

ふっと、私が高校生まで続けていたピアノの教室で弾いていたブラームスの『二つのラプソディ』っていう曲を思い出して。ラプソディはそれを弾く前までに弾いていた曲調とは違って、不協和音がいっぱい入って、あんまり癒やされない曲だなと高校生の時に思って、気が乗らないまま卒業式を迎えてしまって、合格をもらわないまま、その曲だけがプツッと保留された状態で、で、それがずっと頭の片隅に残って、「ああ、あれをなんとかしなきゃ、と」急に思い出して。ひょっとしたら、今弾いたら感じ方が違うかもしれないし、自分にとって気難しいもの、もしかしたら気の進まないものなのかもしれないけど、目標を持って、それを少し上達する姿を、子どもに見せよう。（Oさん）

Oさんは、たとえ気が乗らないものだとしても目標に向かって何かを頑張る姿を娘に見せよう、自分にとって気難しいという思い出が残るピアノ曲にチャレンジした。弾き始めると夢中になり、Oさんの意識の中心が娘の勉強の心配から自分のピアノのことへと変化した。

一旦弾き始めたら、夢中になって、子どもに勉強どうなの？とか言わなくなったんですね。もう言っても変わらないから。自分のことに集中してもっと上手になるにはどうしたらいいんだろうって、この曲を好きになるにはどうしたらいいんだろうって。（Oさん）

子育ての終盤で子どもの進路に関する大きな悩みを抱えているタイミングで娘に背中を見せるための、子育ての一環としての活動だったが、徐々に母親役割を離れた自分の時間となり、Oさん自身の目標ができ、充実感を得られるようになった。

このようにNさんとOさんは、子育てが生活の中心となる時期を過ぎすなかで、子どもの成長やつまづきをきっかけに、子どもとの向き合い方や母親としての役割を見直さざるを得ない局面を迎えている。Nさんは子どもが思春期に入って成長を感じるとともに、これ以上子どもと関わっても子どものためにならない、と思った。自分のための時間を作ることで子どもと程よい距離を保っていくためにピアノを再開した。

○さんは学校に行けずにいる三女の心を解すため、勉強に身が入らない三女に背中を見せるため、二段階でピアノを再開した。そして○さんの場合は、当初は母親役割を遂行するための手段であったピアノが、発表会に出演するという形で自己と向き合うきっかけになっている。

第4節 家庭的役割から離れた自分のための学びの時間

Oさんはピアノを再開する前、Nさんはピアノを再開後に、家庭的役割を中心とした生活の中においても、自分自身のための学びや関心を持つようとする行動が見られた。

専業主婦だったOさんは、子育てに結びつくことなら多少の出費は許容できるが、自分のためだけにお金や時間を使うことに抵抗感や罪悪感を抱いていた。しかし、長女が小学校1年生で三女が0歳、1歳くらいのときに、自分の中に学びたい気持ちが芽生えた。そして、まだ日本語に訳されていない英語の絵本を和訳する講座の情報を知った。絵本ということで子育てと繋がりがあがり、かつ、大学で児童文学を勉強したことを生かせる貴重な体験ということで、その講座を受講することにした。

すごく短い文章で簡単な単語だけど、そのまま直訳したらすごくつまらない文章になるから、絵本の絵を見て、その英文を見て、じゃあどんな日本語をそこに当てたら、ちょうどそれにふさわしい言葉に置き換えるのかってなったときに、言葉の1つ1つにすごい魅力を感じて、あ、日本語って言い方によってこんなにも世界が変わるんだなって。それはすごく今にもつながっているかなって思っている。(Oさん)

Oさんは、この講座を通して言葉の表現の幅や、日本語の持つニュアンスを意識するようになったと語っている。その後のピアノとの関係でも、Oさんは、ピアノで弾きたい曲に出会ったとき、即座に弾き始めずに、まずはどんな風に弾くのかをイメージして言語化することを大切にしている。できるだけ具体的に、納得いく言葉で書き出し、楽譜に感情表現を書き込み、ピアノを打鍵し、練習を重ね、情感を深め、音楽を創る。コンクールや弾き合い会など、積極的に人前で演奏する機会を作るOさんは、このときの経験を、音楽表現を豊かにし客席で聴く人に魅力を伝えるために生かしているという。

Nさんは結婚後、家庭を最優先する生活を送ったため、自分のための時間を持たずにいた。当時を振り返って次のように語る。

私の人生のための時間ってあまりなかったの。ちょうど平成30年間をあの人たち(娘三人)を育てて、で、義父母を見送って、みたいな感じでしょうかね。ほんとに私のための時間っていう、自分のための時間がなかった(Nさん)

複雑な幼少期を過ごし長い間自分自身のことを理解できずにいたNさんは、自分が親となって子育てをする中で、自分が「普通ではない育ち方をした」ことに気付い

た。まずは子どもたちを育て上げることを優先したが、長女が15歳になったときに「一番わかりにくい自分」を理解するため、通信制大学に入学し心理学を学び始めた。心理学を学んだことで幼少期の自分自身を俯瞰できるようになり、自己理解が深まった。大学では他にも芸術に関する教科や哲学も学び、その中で印象的だった内容を振り返り、次のように語った。

デカルト以前と以降でいろんなものが変化の中で、人間の認知が変化する中で、もちろん絵やその音楽にも変化があってそれこそモーツァルトとたとえばショパンは全然違うとか、どうして違うのかっていうのを学べた。弾く上での心構えができるので、それがすごいまいこと楽しく。デカルト以前は人間が神に近づくため、近づくために芸術があるっていう考えなので、モーツァルトとかバッハも神に近づくための音楽なんですけど、でもそこからあとは自分は人間なんだけど人間として何ができるかみたいところにシフトしていくので、その辺もやっぱり理解が深まった。それが学んでいて良かったことかなと。(Nさん)

Nさんは大学で学んだ心理学や哲学、芸術に関する知識について、ピアノの経験が理解を助けていたと語っている。また、心理学を学ぶこととピアノを弾くことの両方が、自身を理解するための営みであったとも述べている。

佐藤：心理学も学ばれたということで、Nさんにとってピアノを再開したことと心理学を学ぶことってどのようなつながりがあったんですか。

Nさん：そうですね、つながりは、自己理解を深めたってとこでつながっています。その、心理学を軸にして自分を理解していくこととピアノとか芸術を軸にして自分を理解っていうか、それは、なんだろう、自分の好きなことを好きなようにやってきたっていうのが自己理解につながっていました。あとは探求する楽しさも両方やることで学べることもあるんです。

Nさんは大学での学びによって心理学という軸と芸術の知識や哲学という軸ができた。二つの軸を通して自分は好きなことを好きなようにやってきたということに気づき、過去と現在を結びつけて自己理解を深める結果となった。さらに第3節でOさんに関して述べたことと同様に、Nさんが大学に入学したのはピアノ再開後であり、Nさんもピアノの再開を起点にして自己と向き合い、さらに探求する活動へとつながっていることがわかる。

OさんとNさんはどちらも家庭が優先されるライフステージの中で、自分自身のことを後回しにしたという共通した経験が見られた。一方で、両者はそれぞれ異なる形

で、過去の学びや関心と再びつながる行動を取っていた。Oさんは絵本の翻訳講座を通して大学時代に学んだ児童文学と子育てにおける絵本を結び付けた。Nさんは大学での学びを通して幼少期の自分と現在の自分、そして学問を学ぶ自分とピアノを弾く自分を関連付けて語っていた。これらの学びの経験はいずれも自分自身の興味関心について考える時間として位置づけられていた。

第5節 ピアノを再開してからの変化

子どもと距離を取るため、子どもに背中を見せるためにピアノを再開したNさんとOさんだが、実際にピアノを再開してから子育てにはどのような変化があったのか。再開してからの変化について次のように語った。

娘がなかなか受験勉強にエンジンがかからなかった時と合致して、まあ難しい曲だけど頑張ろうって言って頑張ってたなら、気がついたら自習室、学校の自習室にお友達と一緒に頑張れそうだって言って、まあ家じゃなくて自習室で頑張ってきたって報告をくれたから、まあ良かったって思ってる。(Oさん)

佐藤：ピアノを再開された後、娘さんへの接し方ってなにか変わったと思いますか。

Oさん：どうかな。うーん。

自分も何か目指すものがあったって、達成感があったって、ていうのはあった上で、より娘が頑張ってるのを気持ちよく応援できるようになったんじゃないかな。

もし自分が何もしてなくて、楽しみもなくて、ただただ娘が勉強していること=生きがいになっちゃってたら、もっとまだまだ足りない！って、無理やりたくさんを望みすぎたかもしれない。頑張ってる気配を感じるだけでも、その時は十分だったから、その時はちょうど良い距離感が取れたかな。

Oさんは、高校生のときに取り組んだものの気難しくて保留になっていた曲を再び練習しはじめて夢中になっているうちに、気が付くと三女は勉強を頑張るようになっていた。他方、Oさん自身にピアノに関する目標ができたことで、Oさんの自己肯定感や自尊心を満たす源が増えた。それによりOさんの意識が三女の勉強に偏っていた状態からピアノの目標を達成することに分散されたのではないか。結果として三女は学校の自習室という新しい環境で友達と勉強に励むようになり、程よい距離感に落ち着いた。

長女の思春期をきっかけに子どもとの距離を調整して自分自身を保とうとしたNさんはピアノ再開後の変化を次のように語っている。

上の子の思春期がなかなか強烈だったんですけど。その強烈さを受け止めないといけないので、そのつらさの逃げ場ができた感じでした。話を聞いてつらくなったら、ピアノを弾いて癒されていました。

(中略)

やっぱり自分ならではのチョイスってあるじゃないですか。やっぱりそれができたっていうのは大きいかなと。やっぱりピアノだと家族のだれにも口を挟まれないし。(Nさん)

この語りから、ピアノの演奏が、子育ての中で生じるつらさや緊張から一時的に距離を取るための「逃げ場」として機能していたことがうかがえる。また、「自分ならではのチョイス」「家族のだれにも口を挟まれない」という表現から、ピアノはNさんにとって自分らしさを感じるものであった上に、家庭内にありながらも、他者の介入を受けにくい活動であったことがわかる。

さらにNさんは義父母の介護と看取りも行っていた時期があり、その時期について、レッスンには通うことができなくても自宅ではピアノを弾いていたと述べている。介護という時間的・心理的な余裕を制限されている状況においても、ピアノはNさんが比較的取り組みやすい活動であり、生活の中に組み込まれていたことが示される。

第6章 考察

第1節 家庭役割の優先によって後回しになる自己

Nさんは「結婚後もピアノを続けるという選択肢がなかった」ため、Oさんは出産後、「育児に専念する」ために、それぞれ結婚、出産というライフイベントをきっかけにピアノを中断している。ライフイベントをきっかけとした生活状況の変化によってブランクに入るという流れは船越（2022）の調査結果で多かったものと一致する。しかし、NさんとOさんの場合、練習時間を捻出できなくなってブランクに入ったというよりも、「結婚したら女性は家事や育児などの家庭役割を引き受けるもの」という当時の社会で優勢だった価値観が強く影響していたと考えられる。「家族のため、子どものため」と、無意識的に自分を後回しにしていたのではないか。そして自分の意志を排除してピアノを中断したことで、その後も両者にとってのピアノは「未完了」や「保留」という状態で残ったのではないか。つまり両者にとってピアノの中断は、単なる趣味の中断ではなく、社会的規範のもとで自己を後回しにした結果「未完了な自己」を生み出したと考えられる。

第2節 母親役割を遂行する自信を取り戻す手段としてのピアノ

NさんとOさんは、子どもの成長やつまづきをきっかけに、母親としての役割を果たすことに停滞感や限界を感じ、「母親としての自分」に自信を失いかけた。そこで家庭とは距離を置いた「母親以外の自分」やそれまでとは異なる子どもとの関わり方を必要とするタイミングが訪れた。Nさんは思春期に入った子どもの成長を感じ、子どもとの距離を調整しようとしたときに、Oさんは、中学校に行けずにいる三女の心を解そうとしたときと、大学受験を決意するも、勉強に身が入らない三女に母親としての思いを言葉ではなく行動で示そうとしたときに、それぞれ自分にとって未完了状態だったピアノが思い出された。そして両者は子どもとの関わりを調整するためにピアノの再開に至った。

Oさんは、自分にとって気が進まないものだとしても頑張る姿を見せるため、高校生のおきに取組んだものの、保留になっていた曲を練習し始めた。ピアノに夢中になっているうちに気が付くと三女は学校の自習室で友人と勉強するようになり、その姿を気持ちよく応援できるようになったと語る。子育て中に再開したピアノが、Oさんの自尊心や自己肯定感を満たすようになり、結果として子どもと程よい距離を保つことにつながった。

Nさんは思春期の長女を育てる中でのつらさや緊張を感じると、ピアノを弾き、自分を癒すことで子育てを継続していた。両者は、未完了だったものを再び始めたことで過去の自分とその当時の自分を結び直し、「家庭的役割を引き受けても同一の自分である」という感覚を回復させた。そしてその後も母親役割を遂行していくための自信

を取り戻したのではないか。この連続性の感覚やピアノを通して得られる充実感は、母親役割に飲み込まれすぎず、適切な距離を保ちながら役割を遂行するための心理的な基盤になったと考えられる。

第3節 ピアノ再開を起点とした自己探求の連鎖

子育てを遂行するために再開したピアノが、子どもは無関係の領域で自分と向き合う起点になる。Nさんの場合はピアノを再開後、次は自分の探求のために大学で心理学を学ぶようになった。Oさんは三女の心を解すために伴奏曲を練習しはじめ、その後は発表会に出演し、ピアノの演奏をさらに追求することになった。Nさんに関しては大学で音楽とは関係ない心理学を学び始め、音楽とは関係ない世界に自分を置きながらもその世界でピアノを弾く自分とのつながりを感じた。領域をまたいで学ぶ自分とピアノを弾く自分がつながっているという連続性の感覚があったのではないか。

また、Oさんは大学時代に学んでいた児童文学を、時間をあけて絵本の翻訳という形で学んだ。これも「再開」という形をとっており、過去の自分と現在の自分をつなげる活動であった。さらに、絵本の翻訳で言語の豊かさを学んだ経験が後に音楽をつくっていく上で土台になっており、Oさんは時間と領域を超えて翻訳経験とピアノがつながる感覚を持っている。

両者はピアノを再開したことで「自分は何が好きなのか」「自分とは何者なのか」という問いが再び立ち上がったのではないか。その結果、両者はさらなるピアノの探求や他の領域の学問へと興味が広がっている。ピアノとは直接的な関係のない領域での学びや経験もピアノとつながっていることを実感し、母親役割を離れたところにいる自分も同一の自分だという感覚が得られた。ピアノの再開は過去の自分とつなげるだけでなく、新しい自己探求の起点にもなり、活動をまたいだ連続性の感覚が得られる。時間的な連続性と領域をまたいだ横断的な連続性によって、自身のライフコースを断片化されたものではなく、一貫したものとして再構成していくのではないだろうか。

第4節 なぜ「ピアノ」であったのか

それにしても、OさんとNさんにとって、他ならぬピアノ演奏が選択される必然性はどの程度あったといえるだろうか。

まず、両者は自宅にピアノを弾くための環境が整っており、家庭を物理的に離れずに母親役割から一時的に距離を取りながら、一人で没頭できる場所があった。母親としての責任を完全に手放すことなく、自分のための時間と空間を確保できるという点は、子育て期の再開を支える重要な条件であったと考えられる。

しかし、要因はそれだけではないだろう。OさんとNさんにとってのピアノは「新しく始めた趣味」ではなく、幼少期から長年にわたって親しんできた活動であった。ピアノ演奏は身体感覚として蓄積されており長期間のブランクがあったにもかかわらず、その時間を飛び越えるだけの感覚が残っていたと考えられる。さらに練習方法や上達のためにレッスンに通うといった学習の方法を知っていたことも、再開への心理的・実践的なハードルを下げていたと考えられる。

また、両者にとってのピアノは納得のいく形で終結した活動ではなく、「未完了」または「保留」の状態として残されていた。再開は単なる余暇活動の開始ではなく、過去に中断された経験を回収し、意味づけ直す行為でもあったと考えられる。

第5節 子育て期における心理的転換点の再検討：難波（2000）の研究との比較から

難波（2000）では、調査対象者の7名の女性は結婚後、子育てを中心とした家庭役割が意識の中心となり、その義務と責任を果たすことで成長した。同時にパートの仕事や趣味・教養・地域活動の場で、自己の能力の発揮・鍛錬、および人々との共感的関わりが彼女らの発達を促進した。やがて子育ての義務から解放されたと感じた頃に、「心理的転換点」が訪れ、それまでの生き方が問い直され、それまで脇にやられていた自分自身の欲求や抑えられていた不満が浮上し、それらを解消、充足する方向に意識が向くようになる。そして人生後半は自分のために使うことのできる、自分のために生きるべき時間だととらえ、それまで研鑽に励んできた趣味・教養・地域活動の場での自己実現を目指している。

しかし、本研究の調査対象者の語りからは、心理的転換点が必ずしも母親役割終了後に生じるとは限らず、母親役割遂行中に訪れ、その後も役割が続いていく場合があることが示された。NさんとOさん両者は子育てまっただ中の、子育てを遂行する上で壁にぶつかったときにピアノ再開のきっかけがあった。子どもと距離を置くため、子どもに背中を見せるためという母親役割を遂行するための方法としてピアノが選ばれ、再開に至った。両者は中断していた活動を再開することで自己に関する連続性の感覚が得られ、母親役割を遂行していくための自信を取り戻した。その後、Oさんはさらなるピアノ演奏の追求、Nさんは自己の理解をするための行動が見られ、子育て中においても自分の生き方を見つめ直し自己アイデンティティが変化するケースがあることが明らかになった。女性のライフコースにおける心理的転換点は連続的、または段階的に訪れる可能性があることが示された。

子育て期におけるこうした心理的転換と活動の再開は、母親役割を支えると同時に、将来的にその役割を手放す際の心理的・実践的な受け皿として機能する可能性がある。

第6節 ジェンダーの視点から

NさんとOさんの語りから、ピアノの再開は、失いかけた母親としての自信を回復させ、母親役割を継続的に遂行することを可能にする営みであることが明らかになった。この点において、ピアノ演奏は、女性が家庭内で母親役割を担い続けるという既存のジェンダー構造を結果的に支えていると考えられる。

その一方で、本研究の分析は、母親役割が女性たちにとって安定した、居心地の良い状態を提供するものではない可能性も示している。NさんとOさんはいずれも、子育ての過程において母親としての役割に行き詰まりや限界を感じ、自分自身を立て直すための営みを必要としていた。ピアノの再開や学びの経験は、そうした不安定な母親役割を内側から修繕する手段として機能していたと捉えられる。母親役割は、女性たちの不断の調整や自己回復の努力によって維持されていることが浮かび上がる。

難波（2000）では、母親役割を終えた後に心理的転換点が訪れ、趣味や教養、地域活動が人生後半の自己実現の場として位置づけられていた。そのため、母親役割そのものの不安定さや、遂行中に生じる葛藤は必ずしも問われていない。これに対し、本研究では、母親役割の最中にこそ心理的な転換や自己の再構築が生じており、母親役割が常に不安定な状態であることが示された。

第7節 まとめと課題

本研究では、子どものときにピアノを習い、結婚・出産を機に中断し、長期間のブランクを経て再開した女性にライフヒストリーインタビューを行った。

その分析からは、ピアノの再開は単なる余暇活動ではなく、子育て期において母親役割に傾いた自己を回復し、自己の連続性を確認することで、母親役割をよりよく遂行し、やがて手放すための基盤をつくる営みであることが明らかになった。また、女性の心理的転換点が母親役割終了後に限定されない可能性を示し、子育て期においても自己を問い直す契機が生じうることを明らかにした。

しかし、本研究は対象者が2名の女性に限られており、かつピアノ経験者のみを対象としている点に限界がある。今後は、他の楽器や他の趣味との比較、さらには男性との比較を通じて再開という経験がライフコースに与える影響を検討していくことが課題である。

引用・参考文献

- ・加藤秀一, 2005, 『図解雑学ジェンダー』加藤秀一・石田仁・海老原暁子, ナツメ社
- ・加藤秀一, 2017, 『はじめてのジェンダー論』, 有斐閣ストゥディア
- ・唐津美和, 2022, 「生涯音楽学習の視点から見たピアノ学習の状況——1998年と2021年の調査結果の比較を通して——」『音楽研究：大学院研究年報』34巻, p. 277-293
- ・木村涼子, 2013, 『よくわかるジェンダー・スタディーズ 人文社会科学から自然科学まで』木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編, ミネルヴァ書房
- ・難波淳子, 2000, 「中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察—語られたライフストーリーの分析から—」『社会心理学研究』第15巻第3号: 164-177
- ・船越理恵, 2022, 「生涯にわたって継続される趣味としての演奏活動の実態: 継続の過程における「ブランク」に着目して」『東京立正短期大学紀要』(50) 118-136

参考資料 (ホームページ)

- ・国立社会保障・人口問題研究所, 2025a, 「人口統計資料集 (2025)」
(<https://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2025.asp?chap=6> 2025年12月18日取得)
- ・国立社会保障・人口問題研究所, 2025b, 「第II部夫婦調査の結果概要: 2. 夫婦の出生力」(https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/gaiyou15html/NFS15G_html07.html 2025年12月18日取得)